

小林恭子の ロンドン発 グローバル随想

第39回

英国営医療での がん治療とは



イラスト・題字：長峯亜里

「治療室に一緒に入りませんか？」

7月末、ロンドン南部サットンにある、がん治療が専門のロイヤル・マーズデン病院でナースに言われたときは、驚いた。がん患者となった家人への抗がん剤投与の前段階として、上腕の静脈に細くて短いチューブ(カテーテル)を挿入する「ミニ手術」がこれから始まるどころだった。

「医療関係者以外の人が入ってもいいのですか？」と思わず聞くと、「どうぞ、どうぞ」と言われる。なんとオープンなのだろうと思いながら治療室に入り、女性の医師からまず何が起きるかを説明された。

靴を履いたまま手術台に横たわった家人。水色の大きなシートで家人の体を覆った後、医師と男性ナースは互いに軽口をたたきながら、終始リラックスした様子で作業を進めていく。時には家人も面白おかしいエピソードを披露して、医師とナースを笑わせる。

筆者は笑うどころではない。医師の手が滑ったら大変だ。「邪魔にならないように」と沈黙を守りながらも、興味津々で流れを見ていた。ネットで検索すると、日本では通常この作業では他者を入れないようだ。

家人に腎臓がんの診断が出されたのは1年ほど前だ。今年2月末に右腎臓を切除したが、それでもまだがんが残っているとと言われて、夏からは抗がん剤投与と放射線の集中治療が始まった。

非常に助かったのが現在までの医療サービスがすべて無料で提供されている点だ。英国で病気になる、診察料が無料の国営「国民保健サービス(National Health Service = 通称 NHS)」を利用できる。NHSは1948年から実施され、貧富の差にかかわらず全ての人に平等に医療サービスを提供する。誕生から77年を経た現在、NHSは慢性的な運営資金や職員の不足、待機リストの長さ、高齢化社会による医療ニーズの増大など山積みの問題を抱えている。

住む場所によってサービスのレベルが異なると言われているが、わが家の場合は専門病院へのアクセスや治療の流れがスムーズで、ケアも手厚い。その意味では幸運だった。英国のがん治療で遭遇した発見を伝えてみたい。

患者を中心に据える

がんの診断を出す前や手術の前後、その後の治療方法についてなど、一連の医療過程において中核となるのは「患者の意向」であった。